

神奈川県立保土ヶ谷養護学校における学校運営協議会開催結果

本校の学校運営協議会を下記のとおり開催した。

| | | | |
|--------------|--|-----------|---|
| 審議会等名称 | 平成30年度 神奈川県立保土ヶ谷養護学校 第3回 学校運営協議会 | | |
| 開催日時 | 平成30年12月12日(水) 午前9時30分～11時30分 | | |
| 開催場所 | 保土ヶ谷養護学校 保護者控室 | | |
| (役職名) 出席者 | 会長：渡部 匡隆、副会長：浅野 和則 委員：栗原 敏郎、大上 和成、松本 哲、田中 久、坂本 知子、 片岡 充彦 事務局：向井 博幸、樋笠 晴美、本間 修治、石塚 いづみ、村山 知美、 三島 賢治、柏原 旭、川口 圭子 オブザーバー：藤田 肇(特別支援教育課) | | |
| 次回開催予定日 | 平成31年2月26日(火) 午前9時30分～11時30分 | | |
| 問い合わせ先 | 神奈川県立保土ヶ谷養護学校 副校長 向井 博幸 TEL 045-714-0581 FAX 045-742-9716 フォームメール(※下記の箇所をクリックすると、お問い合わせフォームをご利用いただけます) 神奈川県立保土ヶ谷養護学校のホームページ(お問い合わせフォーム) | | |
| 下欄に掲載するもの | ・ 議事録 | 議事概要とした理由 | / |
| 審議(会議)経過 | ○開会 (会長) ・過半数の出席による本会成立を確認。 ・配付資料確認。 ・本会の公開原則とホームページによる事前告知確認。 1 校長挨拶 ・出席御礼。ぜひ、貴重な意見をいただきたい。 2 会長挨拶 ・本日は、設置部会検討報告のあと協議が設定されているので、積極的な発言をいただきたい。 3 「アセスメント」について ・教育支援 GL より、「太田のステージ」について説明した。 (委員 A) ・本検査に取り組んでいるのは、この学校だけか、また検査内容は児の年齢により変わるのか。 (教育支援 GL) ・学校として全面的に取り組んでいるのは、そう多くはなかろう。児の年齢により評価方法自体が変わることはない。 | | |

4 設置部会活動報告「切れ目ない支援部会」について

(教頭)

- ・11月17日(土)午後、パラスポーツの交流イベントに合わせ部会を行った。協議内容としては、各種交流の情報交換及びパラスポーツ地域イベントについて、今後の「切れ目ない支援部会」について協議した。

①横浜 F・マリノスふれあいサッカー教室について

(支援連携 GL)

- ・11月17日(土)実施 参加者

横浜 F・マリノス所属コーチ 6名 横浜 F・マリノス フトゥーロ 10名
近隣高等学校サッカー部員 34名 本校児童生徒 22名
地域の方 4名(最年少4歳)

- ・「安全・安心」「どのレベル(サッカーの技術等)の人も楽しめる」をコンセプトにイベントコーナー設置。高等学校サッカー部員が自ら考えて動き、さまざまな役割を担ってくれた。後日、サッカー部員から反省点、改善点などの確かな意見を届けてもらった。今後、参考としていきたい。

②アニメーションダンス・チャレンジ教室について

- ・12月1日(土)実施 参加者

本校児童生徒 19名 兄弟、保護者 16名
近隣高等学校ダンス部 34名 講師(プロダンサー) 2名

- ・全員、楽しく参加できた。

③今後の方向性について

(教頭)

- ・本校の特色として、地域を含めた関係者が集まり、よりよい交流ができるようにとスタートした。パラスポーツについては、予算がついた中でインクルーシブスポーツ、障害がある人もない人も一緒に楽しめるというスポーツをもとに交流できたらと考え、企画した。

(委員 B)

- ・本校においては、さまざまな交流活動がなされている。昨日、本校中学部の生徒が自治会館のクリスマスツリーの飾り付けをやってくれ、和やかな時間をすごした。高等部の生徒は、公園清掃をやってもらっている。お互いに、目にふれる機会が増えることは、理解を深める意味で非常に効果的だ。各学校で交流のあり方を工夫してもらっていると思う。これからは楽しみである。

(委員 C)

- ・話を聴いて、従来と若干違った一歩進んだ交流となっていると感じた。今後、いろいろと周囲を巻き込みながら進めていければと思う。

(委員 D)

- ・大事なことは、共に楽しむことである。一緒に楽しむ中で、いろいろ気づきが出てくる。それを重ねていく中で、スムーズな交流になる。どんな子どもでも参加できる体制づくりが重要である。

(委員 E)

- ・高校との交流活動として、今日もクリスマスコンサートを行うが、もう10年以上続

けている。また、高校生徒の作業体験も 20 年以上取り組んでいる。こういう土台があることで、そこからまた次のことが生まれるかと思う。また何かあったら遠慮なく言ってほしい。

(委員 F)

・関係者がアニメーションダンスに参加した。みんなと同じようには動けるわけではないが、周りが何も言わなくても、暖かい雰囲気であることがわかった。

(会長)

・交流のあり方を工夫していくことを大事にしつつ、継続性・積極性をポイントに互いに楽しめる活動を作り上げるという方向で、次年度以降も続けていただけたらと思う。

5 授業視察

(1) 小学部高学年「生活」の授業 (2) 中学部「作業」の授業

6 設置部会検討報告

(教頭)

・学校運営協議会の名称については、「ほどよう協議会」(仮称)とさせていただくということで、今後検討していきたい。

・独自部会の設置に向けては、学校の特色を生かしたものとして検討していきたい。仮に「環境活用部会」とし、いろいろなアイデアを展開できると考え、本校の独自部会につき検討しているところである。農園を含めた本校の自然環境や人的環境を生かす部会として、また今までのつながりを発展させるための部会として検討を進めていきたい。これを、教育活動に生かしながら地域とのつながりを深め、貢献できるよう展開できたらと考えている。平成 31 年度に試行、平成 32 年度に整えて取り組めるよう、進めていこうと考えている。

7 協 議 テーマ「この地域にある学校として、魅力ある部会とは？」

(委員 A)

・農業との連携はよいと思う。せっかく農園があるので。

(会長)

・農業との結びつきというのは題材である。夢を語ることは大切だが、魅力ある学校として、何をめざしていくのか、学校全体の中でどう位置づけしていくのかをはっきりさせる必要がある。

(委員 C)

・農福連携は政府も推奨しており、農園は宝の山だと言える。他の学校にはないもの。地域をうまく巻き込んでいけるとよい。学校はどのような構想を描いているか。

(教頭)

・今は活用されていないが、以前はアスレチックがあり、トレーニングに使ったりしていた。農業に詳しい教員がいて、いろいろな作物が作られていたが異動してしまい、農園等の維持が難しい状況となった。栗・たけのこも取れるので、地域と協働することで、児童生徒に還元できるようにしていきたい。手入れをするにも、人手も費用もかかり厳しい状況である。この課題を、教育にどう生かしていくかにつ

いてもぜひ皆様のお知恵を拝借したい。

(校長)

・今回、「環境活用部会」にということではなく、委員の皆さんからご意見をいただきたいということである。

・一つには、本校ならではの教育環境があり、それを活用したいということ。学校としては、「地域に開かれた学校」ということを基本に掲げている。これまでの、近隣小・中学校等との間で開かれた関係性もある。しかし、密な地域連携という意味では、まだまだである。仮に農園を使ってとなった場合、いろいろなイベント含め、そこには可能性がたくさんある。農園という資源を使って地域の皆さんとどうつながっていくか。

・もう一つは、そのことが、学校にとっても有益なものではないと意味がない。たとえば、農園で農作業を行っているが、プロではないので、やれることをやっているだけ。そこに企業と連携するなど、プロの手を借りる中で、生産性を高めることができるかもしれない。プロの指導を児童生徒にどのようにわかりやすく授業としてやっていくか、その作業の中で工夫を重ねていく。そうすることで、教員の指導力を高めることも可能となる。地域との協働、また学校の指導力をも高めることをねらいながら、本校の持てる資源を活用していきたい。部会の中では、よりよく活用していくためのご意見をいただきたい。今、農園の話をしているが、農園以外にも資源はある。作業班等いくつかあるが、それぞれの専門の方に入ってもらうことで、今どちらかといえば作品に近い部分があるが、それを製品となるよう、考えて作るなど、いろいろなことができいくと思う。

(委員 D)

・農園には、さまざまな教材があり、自然も豊かにある。農園を題材にすることで、重度のお子さんにとっても学びの場となる。

(委員 B)

・地元自治会として、連携という点でいうと、クリスマスツリーの飾りつけを一緒にしたり、高等部の職業訓練の場として自治会館を提供したりすることで、お子さんたちには外部との接触をしてもらっている。ただ現状、自治会の課題として住民の高齢化の進行がある。地域には、ふれあい樹林があり、その維持管理のメンバーは 8 名いるが、平均年齢が 80 歳に近い状況である。今、話題になっている農園の管理をするのは難しだろう。作業ベースを作っておき、生徒が分担して取り組むことにしかならないだろう。日常管理をする人的負担は相当大きいだろう。

(委員 B)

・外部の大きな組織とつながらないと難しいと思うし、長続きもしないだろう。

(委員 D)

・専門知識に詳しい教員がいるときはうまくいくが、そういう人材がいなくなるとノウハウがないから、せっかく開墾してもどうしようもない状況になってしまう。

(委員 B)

・今、教員の中で詳しい人はいるか。

(教頭)

・とくにはいない。作業準備等、日々の管理を行うのは難しい状況である。

(会長)

・それらのことが、結果的にこの環境が活かされなかった要因ではないか。これまでの反省をふまえて、改善していく必要がある。

・この学校運営協議会の中で、この話をする意図は、地域創生の観点、子どもたちが主体的に地域へという視点が、大きなねらいとしてある。特別支援学校が地域の中で知られていなかったことの課題、いわば「ブラックボックスであったこと」からの脱却である。交流を続けていくことは大事だが、「協働」という言葉は、子どもたちがいる環境、居場所を学校と地域が一緒に作り上げていく作業であると思う。今後、互いに顔が見えるような取り組みにつなげていくには、資源をどう活用し、どういう方法・やり方があるのかを考えていくことが知恵の出どころではないかと思う。今までの、場の提供から人の提供へ、専門的なつながりから、自然で日常的なつながりへとシフトチェンジをしていかないと特別支援学校の存在とか、子どもたちが地域の中へという大きな方向性には向かっていかないのではないか。その方法として、農園の活用ということ考えたときに、今までのやり方をもっとブラッシュアップして考えていかないといけないのではないか。

(教頭)

・まずは、地域とのつながりということで、いろいろなやり方が考えられる。虫が住んでいる学校はなかなかない。たとえば、地域の方に学校に来てもらう機会を広げるところから始めて、それをどういうふうに教育活動につなげていくということを考えていく部会としてもやっていけるのではないかと考える。まずは、地域と隔離されている状況の中で、地域の方に学校に来てもらうことが一番。その先はまたいろいろとある。

(委員 F)

・聞いた話であるが、地元企業を多く知っているシルバーの方が生徒の様子を見に学校に来てくれ、こういう作業ができるのなら、この会社の仕事ができるのではないかと企業に結びつけてくださる方のいる埼玉のとある学校があるらしい。もっと、シルバーの方の力を活用してください、とのことであった。

(会長)

・今日出された意見を、再度学校で練っていただき、次回以降それをもとにして意見交換できたらと思う。こういった議論をできることが、学校運営協議会のひとつのねらいである。このような議論を継続していただく中で、またさらに新しい姿をめざしていければ、と考える。

・やはり、地域にとって役に立つ存在ではないとおそらくパートナーシップにはならない。一方的に、手助けをしてもらう存在だという関係を、いくら積み上げてもおそらくそう理解されていかない。「地域に貢献する存在、地域を共に創り上げていく存在、社会的にかけがえのない価値のある存在」という評価を得ていかないと進んでいかない。もうちょっと議論したほうがよいと思うが、本日はこれで終了とする。

8 事務連絡等

9 副会長挨拶

・学校運営協議会として、有意義な会となった。ありがとうございました。

| | |
|----------------|---|
| | <p>10 校長挨拶</p> <p>・子どもたちが社会貢献できるということは大事なことである。自分たちが社会に役立っているという、自己有用感をきちんともつことは重要であると考えます。また、そういう社会になってほしい。社会貢献できる子どもたちに、我々は育てていかなければならないし、そういう地域社会を育てていかないといけないと思う。今日はありがとうございました。</p> <p>○閉会</p> <p style="text-align: right;">以 上</p> |
| <p>会 議 資 料</p> | <p>※添付なし</p> |